北白川下層Ⅱｃ式・Ⅲ式土器の変遷

東海・近畿地方における縄文時代前期後葉の土器様相

松田光太郎

1. はじめに

縄文時代前期、東海地方西部～近畿・中国地方には北白川下層式土器（広義）が存在する。当該土器は山内清男氏や鎌木義昌氏により北白川下層Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式土器に分けられ（江坂 1951・鎌木 1959）、1960 年代以降、前期後葉に北白川下層Ⅱ式・Ⅲ式土器が位置づけられた（鎌木他 1965 編年表）。

このうち北白川下層Ⅱ式土器はⅡａ・Ⅱｂ・Ⅱｃ式土器に細分され（岡田 1965・網谷 1981・1989）、小杉康氏は北白川下層Ⅱｂ式土器を関東地方における前期後葉の諸磯ａ式～ｂ式土器古段階併行に位置づけた（小杉 1985）。また東海地方の研究により、北白川下層Ⅲ式土器は関東地方における前期末葉の十三菩提式土器併行とされた（増子 1985）。したがって、北白川下層Ⅱｃ式土器は関東地方の土器型式に対比すると、諸磯ｂ式土器古段階～諸磯ｃ式土器の２型式に併行することになる。

同時期に置かれる東西日本の土器型式のうち、関東地方の諸磯ｂ式土器は多くの先学により細分研究が進められ（鈴木徳 1979・中島 1980・鈴木敏 1980 他・今村 1981・白石 1983・羽生 1987・谷口 1989・岩橋他 1992・今福 1999・関根 1999・細田 1999）、筆者は少なくとも５段階に分けることが可能であると考えている（松田 2007）。また諸磯ｃ式土器も土器の変遷を詳細に辿る研究によれば、５段階（松田 2001）ないし６段階（今村 2000）に分けられる。一方近畿地方における北白川下層Ⅱｃ式土器に関して細分はなされていない（網谷 1989・鈴木 2008）。唯一東海地方の北白川下層式土器について、増子康眞氏が大麦田Ⅰ～Ⅲ式・北裏ＺⅣ式土器に細分しているだけである（増子 1985・1992b・1996）。またそれもあって、北白川下層Ⅱｃ式土器が北白川下層Ⅲ式土器へどのように移行したのかほとんど解明されていない。北白川下層Ⅱｃ式土器は諸磯式土器に比べ、土器の時間的変化が緩慢であったとも言えようが、当該土器に関しては細分する余地は十分あると思われる。

筆者は北白川下層Ⅱｃ式土器古段階の土器に関して変遷案を提示したことがあるので（松田 2013）、本論では前論考で扱わなかった北白川下層Ⅱｃ式土器（後半）の変遷を考察し、細分を行うことにする。そして北白川下層Ⅲ土器の成立の問題についても考えてみたい。

2. 研究略史

北白川下層式土器は、1917・1918 年に大阪府藤井寺市国府遺跡を浜田耕作氏が発掘し、それを報告したのが学界への登場の嚆矢であろう（浜田 1918・1920）。その後 1926 年兵庫県明石市大歳山遺跡を調査した直良信夫氏は大歳山式土器を発表した（直良 1926a）。氏は報告の中で土器を第一類「縄体を基礎として、最も素朴に発達せるもの」と、第二類「之が稍々横道にそれて発達変化したもの」に二分した。氏は異なる特徴をもつ二者をもって大歳山式土器を提唱した（直良 1927）。

また 1934 年に京都市北白川小倉町遺跡の発掘調査が行われた。その報告中、小林行雄氏による土器の層位的出土傾向分析が紹介されている（梅原 1935）。土器が条痕文（第一類）・爪形文（第二類）・縄文（凸帯縄文を含む・第三類）・朱彩文（第四類）・特殊凸帯文（第五類）・磨消縄文（第六類）・厚手（第七類）に分けられ、条痕文・爪形文・縄文は下層から上層まで出土するが、特殊凸帯文は

上層、磨消縄文や厚手の土器も上層ないし最上層に限定される、と報告された。条痕文・爪形文・縄文（凸帯縄文）・朱彩文・特殊凸帯文は磨消縄文より下層から出土すると共に、特殊凸帯文は凸帯縄文より上層から出土することがとらえられていた。

その後、山内氏は1937年「縄文土器型式の細別と大別」中の編年表において、近畿地方の土器型式として国府北白川１を仮称し、吉備地方の磯ノ森、東海地方の鉾ノ木と共に、関東地方の諸磯ａ・ｂ式土器併行とした（山内1937）。この山内氏の北白川１は氏自身により北白川下層１・２・３式土器に３細分され、それが江坂氏によって『歴史評論』誌上に紹介される（江坂1951）。江坂氏は、北白川下層１式は条痕地に爪形文をもつもの、同２式は縄文地に爪形文、同３式は浮線文をもつものとし、同３式の浮線文上には刻みの施されたものと縄文を施文したものがあると述べている。

また鎌木義昌氏は『世界考古学大系』（平凡社）の中で、北白川下層式土器を、北白川下層Ⅰ式（羽島下層Ⅲ式）、同Ⅱ式（磯ノ森式）、北白川下層Ⅲ式（彦崎ＺⅡ式）３つに細分した（鎌木1959）。北白川下層Ⅰ式は条痕文地に爪形文・刺突文をもつもの、同Ⅱ式は爪形文と縄文をもつもの、Ⅲ式は凸帯文をもつとされている。このうちⅢ式土器の記述には「縄文が羽状にほどこされる場合が多い。胴に渦状の凸帯をほどこしたかなりはなやかな文様が知られている。大歳山式と呼ばれる土器群の中にはこの型式のものも含まれている」とある。森川昌和氏も述べているように、江坂氏の北白川下層３式と鎌木氏の北白川下層Ⅲ式は相違があり、江坂氏の北白川下層３式は凸帯文、鎌木氏の北白川下層Ⅲ式は北白川小倉町遺跡報告（梅原前掲）の特殊凸帯文をさしていた（森川1963）[1)]。

その後、1962年福井県鳥浜貝塚の調査が行われた。岡田茂弘氏は鎌木氏の北白川下層式細分名称を用い、鳥浜貝塚の成果を踏まえ、北白川下層Ⅰ・Ⅱ式土器を細分した。このうち本論に関係する北白川下層Ⅱ式土器は連続爪形文をもつⅡａ式、Ｃ字形爪形文を主とするⅡｂ式、凸帯上に刻みまたは縄文を施したⅡｃ式という３つに細分がなされた（岡田前掲）。また同書の中で北白川下層Ⅲ式土器･大歳山式土器についても記述され、北白川下層Ⅲ式土器は「羽状縄文または斜縄文を地文とし、いわゆる特殊突帯文をつけた平底」と記述された。また大歳山式土器は「北白川下層Ⅲ式に類似した器形・文様を有するが（中略）、五角形または周囲にえぐりをいれた底部をもち、文様では突帯上に先端を加工した管内側でＣ字爪形文をつけ、またまれにアナダラ続貝殻を押捺した文様があり羽状縄文を欠く点で、北白川下層Ⅲ式と区別される」とされた。前期末葉の土器群について直良氏の大歳山式土器は第一類・第二類からなっていたが（直良1927）、岡田氏が直良氏の第一類を大歳山式土器、第二類を北白川下層Ⅲ式土器としたことは、今日の研究の方向性を与えた[2)]。

以上の北白川下層式土器細分は、同じく鳥浜貝塚を調査した網谷克彦氏によって引き継がれ、氏により北白川下層Ⅰａ式・Ⅰｂ式・Ⅱａ式・Ⅱｂ式・Ⅱｃ式・Ⅲ式の変遷が説明された（網谷1979・1981）。今日の北白川下層式土器研究は網谷氏の論考が基本になっていると言っても過言ではない。また網谷氏は『縄文土器大観』の中で、Ⅱｂ式土器を古・新の２小期に分けた。これは爪形文と凸帯文が共伴する段階の存在を設定したもので、Ⅱｂ式（古）はＣ字形爪形文をもつ段階、Ⅱｂ式（新）は爪形文と凸帯文が共伴し、爪形文が凸帯文に変化した段階とした（網谷1989）。

この爪形文と凸帯文の共存は小杉氏も認めているが、小杉氏は同段階をⅡｃ式古段階とする見解を示している（小杉1999）。凸帯文の出現をⅡｂ式（新）とするか、Ⅱｃ式古段階とするか、２つの見解があるが、筆者は凸帯文が北白川下層Ⅱｃ式土器のメルクマールとなっていることから、その出現段階を北白川下層Ⅱｃ式土器古段階と呼称している（松田2013）。

また北白川下層Ⅲ式土器については、松井政信・古川登氏は福井県浄土寺遺跡出土土器をもとに、北白川下層Ⅲ式土器から大歳山式土器への口縁部断面形態の変化を述べた（松井・古川1983）。北白川下層Ⅲ式土器は口縁部内面に縄文帯をもたない段階から、幅狭縄文帯をもつ段階、更に幅広縄文帯をもつ段階へと変化し、幅広縄文帯とΣ状の工具による連続刺突をもつ大歳山式土器へつながる

と想定し、口縁部形態へ着目する視点の有効性を示した。

その後、同様の視点で京都府志高遺跡出土土器を分析した三好博喜氏も、北白川下層Ⅲ式土器を口縁部内面に幅狭縄文帯をもつ段階から、幅広縄文帯をもつ段階（新段階）へ変遷すると考え、前者で縄文付き凸帯をもつ土器を北白川下層Ⅲ式成立期の土器と考えた。また後者（新段階）では口唇部に突起をもつものがあり、突起の内外を半截竹管で押し引く手法が、口縁部に粘土紐を貼付して内外からΣ字状工具で刺突する大歳山式土器へ変化すると考察した（三好 1988）。また同氏は志高遺跡の報告書の中で、北白川下層Ⅲ式土器の口縁部形態を第１形態ａ類（口縁部内面に幅狭縄文帯をもち、外面に縦位短隆起線をもたないもの）、第１形態ｂ類（口縁部内面に幅狭縄文帯をもち、外面に縦位短隆起線をもつもの）、第２形態ｃ類（口縁部内面に幅広縄文帯をもち、口縁端部に刻みを加えないもの）、第２形態ｄ類（口縁部内面に幅広縄文帯をもち、口縁端部に刻みを加えたもの）、第３形態（口縁部に円形・楕円形特殊凸帯文をもつもの）に分けた。そして北白川下層Ⅲ式土器は第１・２形態→第３形態（北白川下層Ⅲ式新段階）と言う変遷を経て、大歳山式土器につながると考えた（三好 1989）。この三好氏の分類した第一形態の特徴は鈴木康二氏により重要視され、鈴木氏は志高遺跡の第１形態ａ類の土器を北白川下層式古段階、それ以降の土器を同式新段階とした（鈴木 2008）。

この他、該期の研究としては、北白川下層Ⅲ式から中期初頭の鷹島式に至る間の特殊凸帯文の幅や施文技法の変遷を考察した山岸洋一氏の研究がある（山岸 1996）。

他方、東海地方西部で当該時期の研究を進める増子康眞氏は東海地方の土器のもつ地域性を重視する研究を展開している。本論で扱う北白川下層Ⅱｃ式土器については、東海地方の地方型式として小御所式→清水ノ上Ⅲ式→大麦田式→北裏ＺⅣ式という編年を発表している（増子 1985・1992・1996・1999・2001）。今回本論で扱う北白川下層Ⅱｃ式土器後半では大麦田式と北裏ＺⅣ式が相当する。

大麦田式土器は愛知県豊田市大麦田遺跡（万場垣内遺跡第２地点）出土土器をもとに設定された土器型式で、凸帯縄文と平行沈線文からなる（吉田・紅村 1968、紅村・増子他 1978・増子 1981・1985）。大麦田遺跡では諸磯ｂ式土器中段階の土器が存在するが、同じく大麦田式土器を出す岐阜県恵那市花無山遺跡で諸磯ｂ式土器新段階の土器が存在することから、大麦田式土器は大麦田式古、同式新と細分された（増子 1985）。

また 1989 年に高木宏和氏は岐阜県坂祝町芦戸遺跡の資料を報告し、氏は芦戸Ⅰ～Ⅲ式土器を提唱した（高木 1989）。増子氏は芦戸遺跡出土資料全てを同一時期ととらえた上、大麦田Ⅰ～Ⅲ式土器を設定した（増子 1992b）。従来の大麦田式古が大麦田Ⅰ式、同式新が大麦田Ⅱ式土器、芦戸遺跡出土資料が大麦田Ⅲ式土器にされたのであった。

更に増子氏は岐阜県関市市場遺跡の発掘調査報告書（徳田他 1988）で報告された土器をもとに大麦田Ⅲａ式土器を設定し、従来の芦戸遺跡に代表される大麦田Ⅲ式土器を同Ⅲｂ式土器とした（増子 1996）。

北裏ＺⅣ式土器は岐阜県可児市北裏遺跡出土資料（大江 1973）をもとに、増子氏が提唱した土器型式である（増子 1975）。その後 1992 年、増子氏は従来の北裏ＺⅣ式土器には大麦田Ⅲ式土器が混じっていたとして、大麦田Ⅲ式土器を除外した新組成をもって北裏ＺⅣ式土器と変更した（増子 1992b）。これらにより、東海地方西部の北白川下層Ⅱｃ式土器後半期（諸磯ｂ式中段階～諸磯ｃ式土器新段階）は大麦田Ⅰ式→同Ⅱ式→同Ⅲａ式→同Ⅲｂ式→北裏ＺⅣ式の５階梯に細分されたのである。近畿地方の土器群は細分が進んでいないが、東海地方西部ではかなり細かい細分が発表されたと言える。

以上、北白川下層Ⅱｃ式および同Ⅲ式期の土器研究史を概観した。その研究は主として文様要素や口縁部形態に着目したものが殆どで、文様（モチーフ）に対する視点は少ないと言える。そのため、土器の変化がわかりにくという欠点がある。本論ではその欠を補い、文様の変化に力点をおいて叙

述してみたいと思う。また型式名称についてであるが、小杉氏は北白川下層Ⅱｃ式土器後半期の土器に対して、北白川下層Ⅱｄ式土器という名称を使用している（小杉 1991）。筆者は大麦田式土器の組成をなす縄文付き凸帯（凸帯縄文）は近畿地方では北白川下層Ⅱｃ式土器の範疇で捉えられていることから（網谷他 1985）、北白川下層Ⅱｃ式土器の細分という形で論を進めることにする。

3. 東海地方西部における北白川下層Ⅱｃ式土器（後半期）・Ⅲ式土器の変遷

1）大麦田式土器の検討

東海地方西部の前期後葉土器群の研究は増子氏の研究が最も進んでいるものである。したがって本論ではまず増子氏の大麦田式土器・北裏ＺⅣ式土器の内容を検討する。

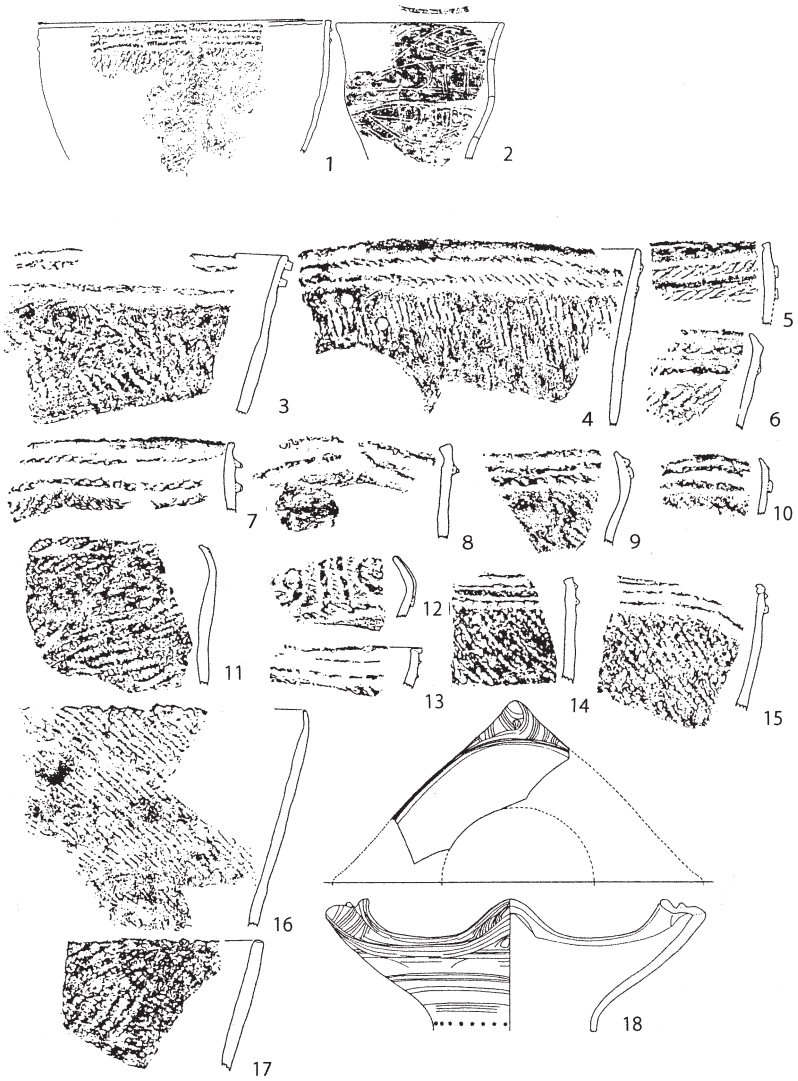
増子氏による大麦田式土器と北裏ＺⅣ式土器の最新の認識（増子 1992b・1996・1999 b）は以下のような内容である。なお増子氏は論考中、伴出すると考える北陸地方の土器群も提示しているが、ここでは議論の複雑化をさけるため、諸磯式土器のみを紹介する。

大麦田Ⅰ式土器（第１図１・２）：口縁は単純である。少条（１・２条）の横位の縄文付き凸帯文（凸帯縄文）をもつ土器が主体をなし、それに平行沈線文を描いた深鉢・浅鉢形土器と少量の雑な刻み付き凸帯をもつ土器が伴う。諸磯ｂ式土器中段階が伴出する。

大麦田Ⅱ式土器（第１図３～17）：口縁は直立・外反・内折など変化が現れる。凸帯は少条の縄文付き凸帯文が主体であるが、多条のものも出現する。凸帯文の文様化が進み、縦位区画も存在する。また、平行沈線文を描いた深鉢形土器が存在する。諸磯ｂ式土器新段階の土器（第１図 18）が伴出する。

大麦田Ⅲａ式土器（第２図１～ 19）：フ字形内折口縁（同図１）が出現する。縄文付き凸帯文は多条で細い。凸帯文は文様化し、縦位区画も存在する。諸磯ｃ式土器が伴出する。岐阜県関市市場遺跡出土資料（徳田他 1988）に代表される。

大麦田Ⅲｂ式土器（第２図



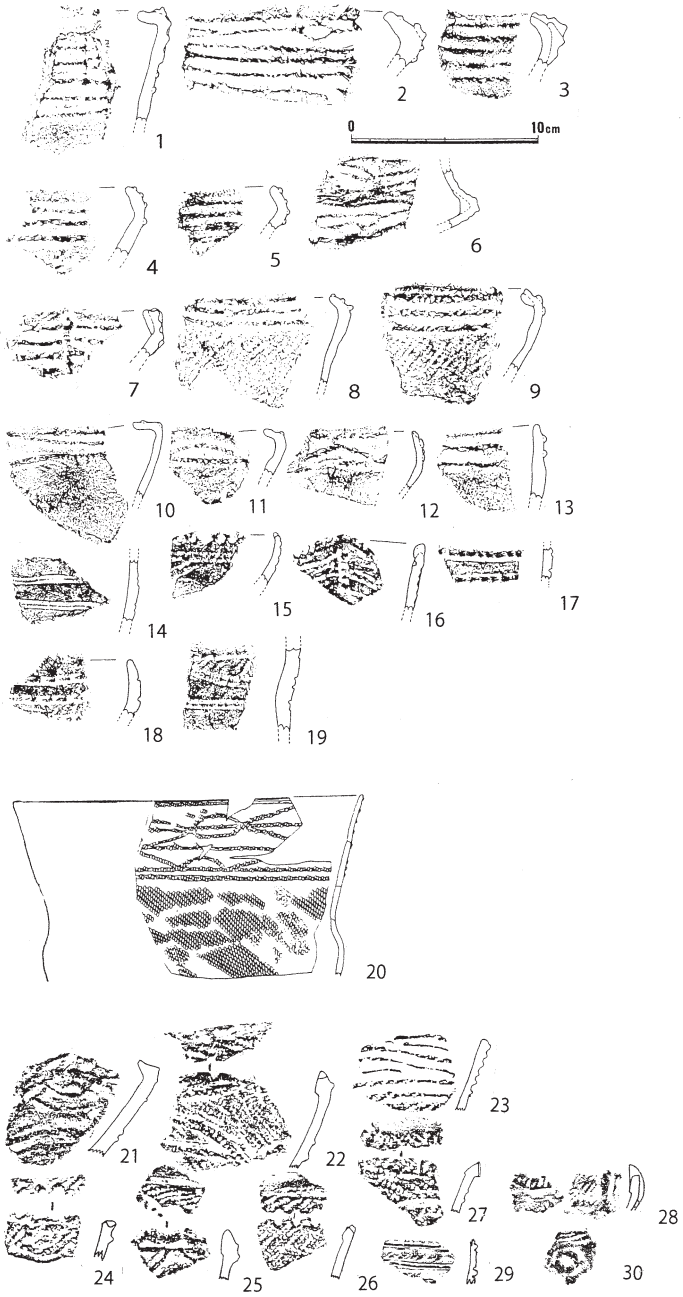
第１図　増子氏による大麦田Ⅰ・Ⅱ式土器（増子 1996・1999b）

20)：口縁は直口またはフ字形内折口縁が存在し、内面に縄文付き凸帯文を貼付する。縄文付き凸帯文は多条。凸帯文は横位、連続菱形文、円環や斜線を組み合わせたものがある。その他隆線文・刺突文がある。諸磯ｃ式土器が伴出する。芦戸遺跡出土資料に代表される。

北裏ＺⅣ式土器（第２図 21 ～ 30）：口縁内面に凸帯文や幅広粘土帯を貼付する。北白川下層Ⅲ式土器が主体をなす。

以上を通観してわかることは、増子氏の解説は口縁部形態・凸帯文の条数・文様に着目して縄文付き凸帯文の系統的変遷を中心に述べ、それに平行沈線文などの組成を付加的に説明していると言える。とりわけ凸帯文の条数が増えること、口縁部が内折し、口縁内面の縄文付き凸帯文に変化していくことを指摘したことは非常に価値ある指摘であったと評価できる。また各型式とも代表する遺跡や遺構単位の出土事例があることから、混在物は含むものの、ある程度の時間的まとまりは示していると思われる。

しかしその一方、同一の属性（例えば少条の凸帯文、多条の凸帯文など）が複数型式にわたって存在しており、個体の土器を上記細分型式に比定することに困難を伴う場合がある。また上記の説明でもわかるが、多条の縄文付き凸帯文は大麦田Ⅱ式土器・Ⅲａ式土器に存在するので、大麦田Ⅱ式土器と同Ⅲａ式土器の類似性が高く、両者は区別するのが難しい場合が多々あると思われる。更に増子 1992 の北裏ＺⅣ式土器は従前の北裏ＺⅣ式土器から大麦田Ⅲｂ式土器を削除したので、北白川下層Ⅲ式土器が組成の大部分を占めるようになり、東海地方西部の独自性は少なくなっている。また増子氏の説明では、前型式との型式学的関連性の記載が少ないという問題点もある。前型式としては氏のいう清水ノ上Ⅲ式土器があり、氏の記述には、清水ノ上Ⅲ式土器（北白川下層Ⅱｃ式古段階併行）から大麦田式土器への変化についての記述も若干はあるが、清水ノ上Ⅲ式土器に存在した各種の文様が、大麦田式土器にどのように収斂したのかが、あまり書かれ



第２図　増子氏による大麦田Ⅲａ・ｂ式・北裏ＺⅣ式土器（増子 1992・1999b）

ていない。

次の項では、東海地方西部の土器群が、北白川下層Ⅱｃ式古段階の土器からどのようにして変化したかという点を考慮に入れながら、筆者の変遷観を述べてみることにする。

なお増子氏は、東海地方西部で縄文付き凸帯文土器が盛行する時期、近畿地方にも縄文付き凸帯文土器はあるが、近畿地方の土器の主体は爪形刺突や刻み付き凸帯文であると考え、近畿地方と別の型式名（大麦田式土器）を使用している（増子 1996）。

筆者は鳥浜貝塚 1983 年度調査 10 ～ 15 層（網谷他 1984）などで刻み付き凸帯文と共に縄文付き凸帯文が多く出土していることを重視し、近畿地方でも縄文付き凸帯文が盛行する時期があると考えている。東海地方西部も近畿地方も共に縄文付き凸帯文土器が主体的に存在する時期があり、地域差は小さいと考え、東海地方西部の土器も北白川下層Ⅱｃ式土器と呼称することにする。

２）東海地方西部の前期後葉土器群の変遷

北白川下層Ⅱｃ式土器中段階前葉（第３図１～３）

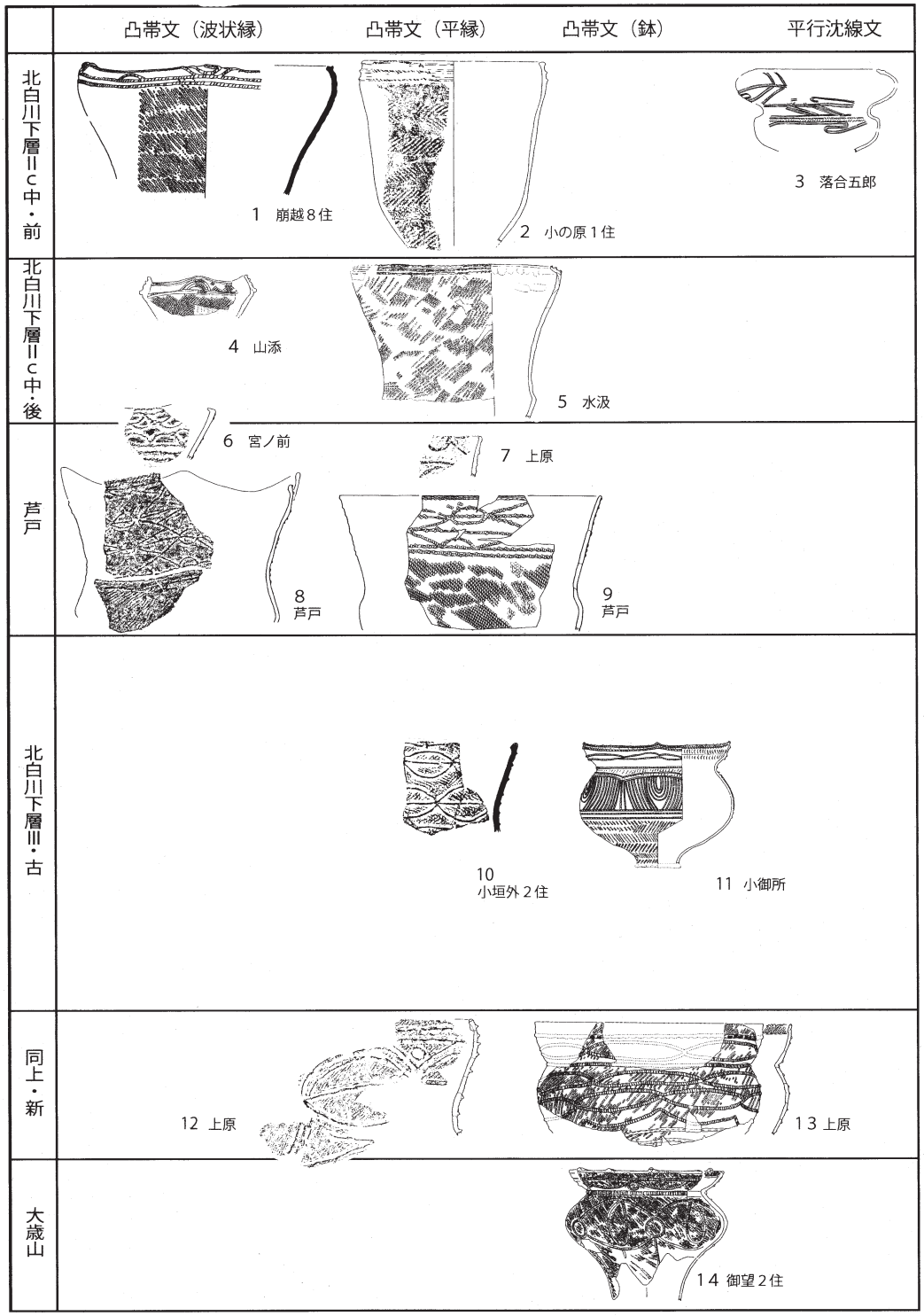
凸帯文土器が主で、それに平行沈線文土器が伴う。

凸帯文土器では口縁は平縁（第３図２）が多く、波状縁は小波状のものが少しある程度である（同図１）。口縁部は直立ないしは緩く内湾する。口唇部は平坦面をなし、内側にわずかに突出または角張る（同図１・２）[3)]。これは口唇面に施文することがあるため、施文域を確保することと関係していると思われる。北白川下層Ⅱｃ式土器古段階も口唇部が平坦面をなし、内外面にわずかに突出して、口唇部の器厚がその直下より厚い傾向があるが（第６図１・２）、本段階の口唇部が内側に突出または角張ること（第６図３・４）はその名残であると考えられる。

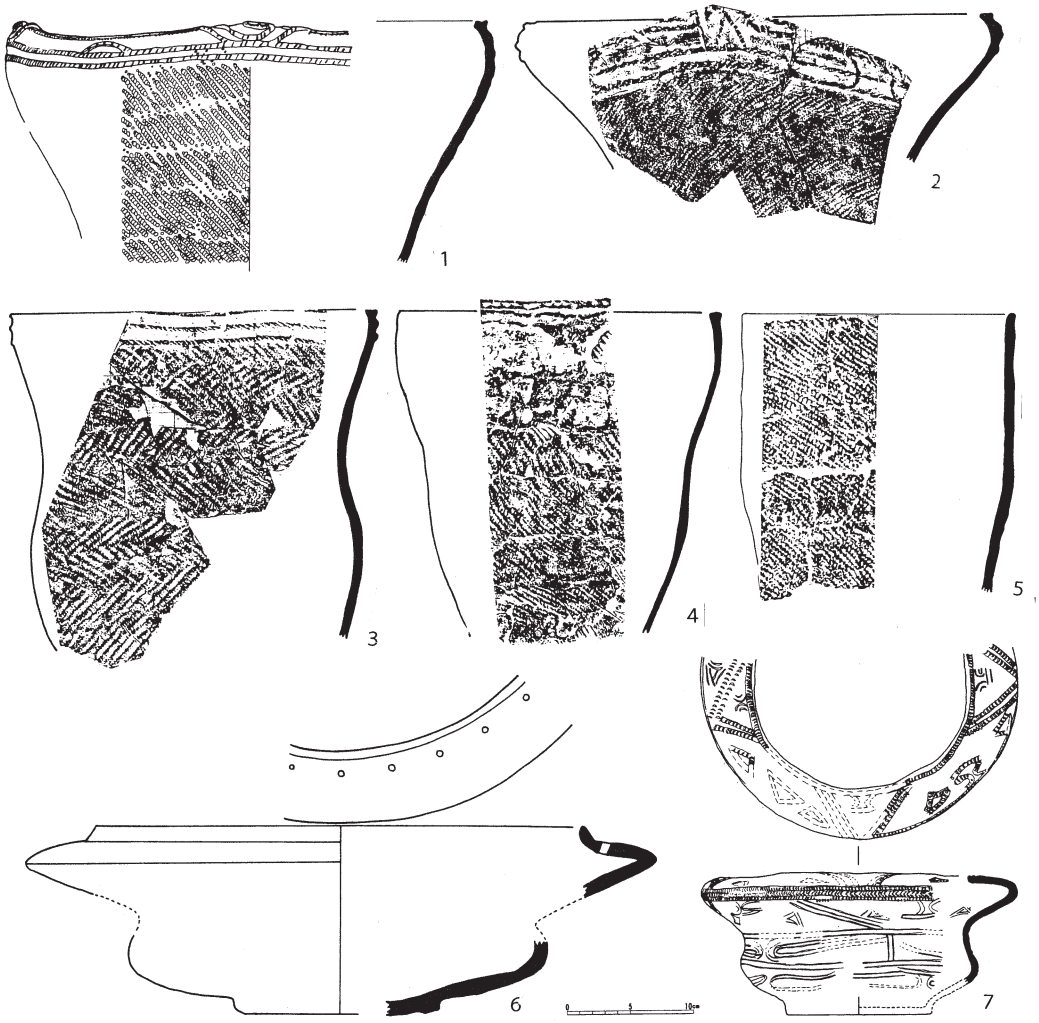
凸帯文は刻み付き凸帯文と縄文付き凸帯文がある。刻み付き凸帯文では、前段階の北白川下層Ⅱｃ式土器古段階に比べ、刻みは細い傾向がある（第３図１・２）。また刻みは凸帯上のみならず器面にまで達するように引かれ、やや雑な感じのするものもある（第６図３・４）。縄文付き凸帯文（第４図２）の凸帯文上の縄文は刻みを省力化したものと考えられる。関東・中部地方の諸磯ｂ式土器では中１段階でいち早く縄文付き浮線文があり、その影響で東海地方西部でも凸帯上の縄文加飾が始まった可能性が考えられるが、本地域で独自に開始されたこともありうるため、どちらとは断定できない。

凸帯文は２条程度横走したものが主流である。横走する凸帯文のみで文様が構成されるもの（第３図２）と、横走する凸帯文間に文様が描かれるもの（同図１）があるが、どちらも文様が口縁部に限定的に施される特徴がある。横走する凸帯文間に文様が描かれる場合、その文様は幅狭く、背中合わせの扁平な横位弧線文が交互に配されるものが多い（同図１）。北白川下層Ⅱｃ式土器では古１段階から古２段階にかけて文様帯が胴部に拡大するが（松田 2013）、中段階になる再び文様帯幅は幅狭化に向かい、文様も弧線文に限定されるようである。胴部は縄文が施文され、羽状縄文・斜行縄文がある。

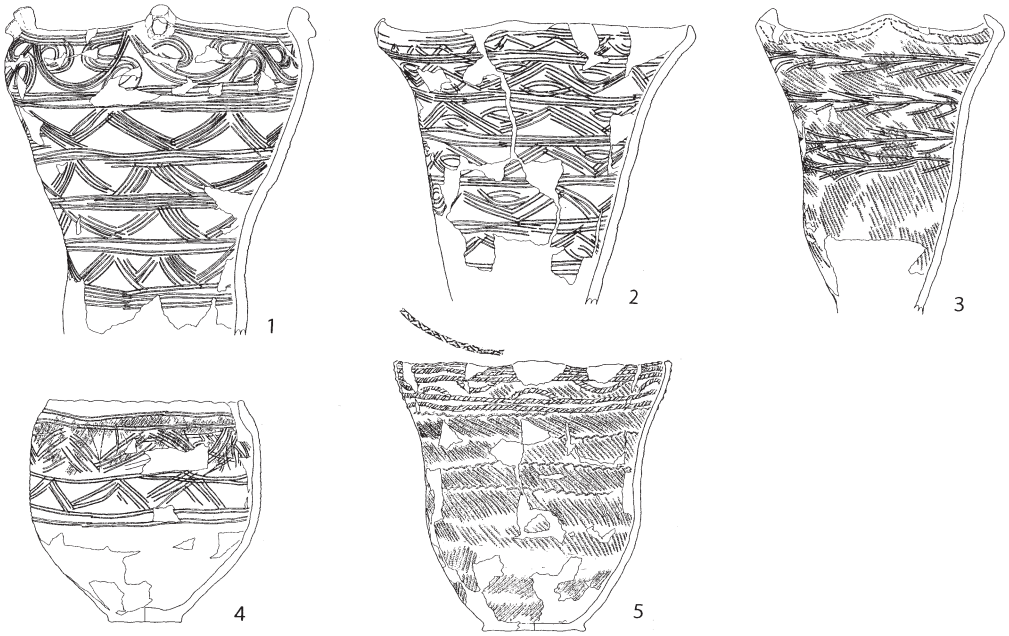
平行沈線文土器は浅鉢形土器と深鉢形土器からなる。量的には浅鉢形土器の方が多い。浅鉢形土器はみな口縁が内湾ないし屈折するもので、複段のもの（第３図３）と単段のものがある。平行沈線による文様は多重渦巻文・つの字状文などがある。浅鉢形土器は諸磯式土器に多く存在し、複段内湾浅鉢形土器は諸磯ｂ式土器の中で生成したものであるから、諸磯ｂ式土器を模倣して製作されたものと考えられる。また文様も諸磯ｂ式土器の中で成立したものを取り入れたものである。しかし諸磯ｂ式土器の浅鉢形土器の文様は半截竹管を用いて単沈線を描く技法で描出され、平行沈線文で描かれるものではない。模倣製作する過程で、本地方で独自に製作されたものと言える。深鉢形



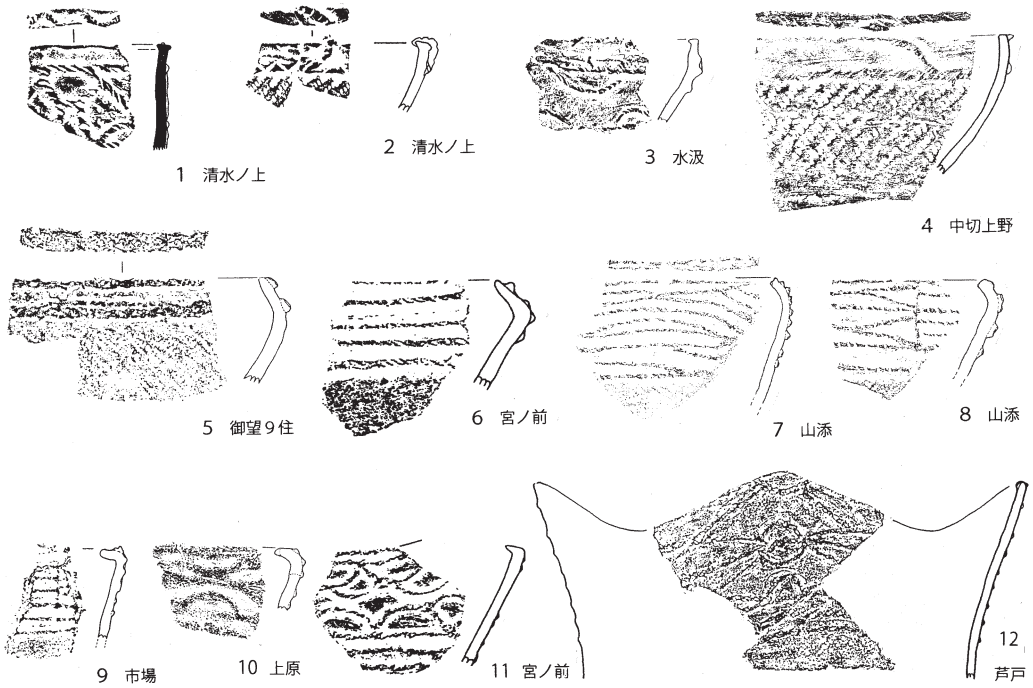
第3図　北白川下層Ⅱc式・Ⅲ式土器変遷図　東海地方西部（1/10）



第４図　北白川下層Ⅱｃ式土器中段階前葉　長野県大滝村崩越８号住居址出土土器（1/8）



第５図　北白川下層Ⅱｃ式土器中段階前葉併行土器群　神奈川県大井町矢頭遺跡２号住居址出土土器（1/10）



第６図　北白川下層Ⅱｃ式土器の口縁部資料（1/4）

土器（第７図）は渦巻文や矢羽根状文、横位弧線文などを描いている。諸磯ｂ式土器の文様を模倣して製作されたものと考えられる。

第７図　北白川下層Ⅱｃ式土器中段階前葉　沈線文土器（1/10）

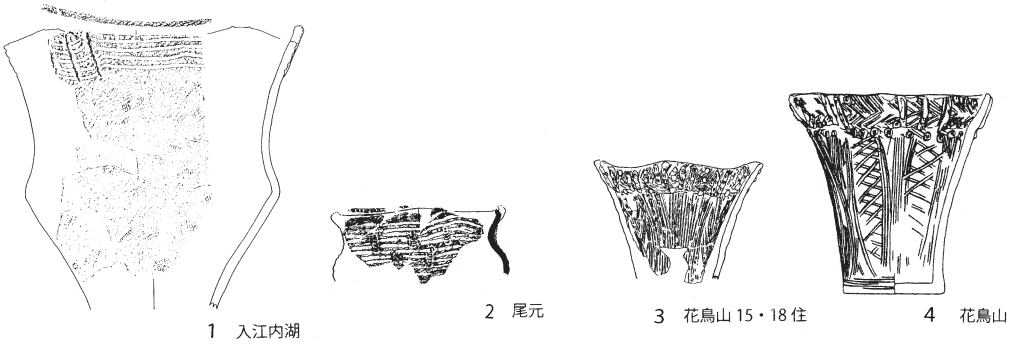
本段階の土器としては長野県王滝村崩越遺跡８号住居址出土資料（第４図１～５・７）（神村他 1982）がある。また岐阜県揖斐川町小の原遺跡１号住居址出土資料（宇野他 1991）、愛知県豊田市大麦田遺跡出土資料（吉田他 1968・川合他 2013）にも多く出土している[4)]。崩越遺跡８号住居址では上述した特徴をもつ凸帯文土器数個体が、諸磯ｂ式土器中２段階に主として存在する複段内湾浅鉢形土器（同図６）と共に出土している。また関東地方の例になるが、神奈川県大井町矢頭遺跡２号住居址では諸磯ｂ式土器中２段階前葉の土器と一緒に本段階の凸帯文土器（第５図５）が出土しており、諸磯ｂ式土器中２段階前葉との併行関係を示している（天野他 1997）。

本段階は増子氏の大麦田Ⅰ式土器に相当すると思われる。

北白川下層Ⅱｃ式土器中段階後葉（第３図４・５）

凸帯文土器が主である。

凸帯文土器では口縁は平縁が多く、波状縁は小波状のものが少しあるのみである。口縁部が内折するもの（第３図４・５）が出現する。最大径は口縁直下にあるが、胴部中位のやや下がった所で括れ、胴部下半が張り出す器形をなすものが特徴的である。こうした口縁部の内折、胴部下半の張り出しは諸磯ｂ式土器新段階の特徴と軌を一にするもので、諸磯ｂ式土器の影響と考えられる。またこの内折が強まり、増子氏のいうようにフ字型（第６図９・10）を経て、次型式の芦戸式土器の口縁部内面の肥厚帯（第６図 11・12）につながると考えられる（増子 1996）。



第８図　北白川下層Ⅱｃ式土器　単沈線文土器と関連資料（1 ～ 3:1/10、4: 不明）

口唇断面形は単純な棒状をなし、口唇部の内側への突出はなくなる。

凸帯文は縄文付き凸帯文（第３図４・５）が主体となる。三重県山添遺跡出土土器（小濱他 2007）や岐阜県御望遺跡９号住居址出土土器（内堀 1995）の凸帯文上の施文を見ると、刻み付き凸帯文（爪形刺突付き凸帯文も含む）[5] もあると言える。

凸帯文は２～４条程度横走したものが主である。前段階までは文様の幅狭化が進行していたが、口縁部の内折に合わせ、内折ラインを境に、その上下両方に文様を描くもの（第６図６～８）が出現し、凸帯文の条数増加につながったと考えられる。文様は横走する凸帯文のみで文様が構成されるもの（第３図５）が主体であるが、横走する凸帯文間に文様が描かれるもの（同図４）もある。横走する凸帯文間に文様が描かれる場合、その文様は幅狭く、扁平な横位弧線文が描かれる（同図４）。また増子氏も指摘するように（増子 1996　13 頁）、凸帯による短い縦位線をもつものもある（第６図７・８）。短縦位線をもつものでは横走凸帯文が５条以上あるものがある。短縦位線は口縁部に限定され、口縁部付近に限定される縦位貼付文は中部地方の諸磯ｃ式土器古段階にもあることから（第８図３・４）、短縦位線や凸帯文が５条以上あるものは諸磯ｃ式土器古段階に併行すると考えられる。胴部は斜行縄文が施文される。

平行沈線文土器の存在は不明瞭である。また縄文を地文として、口縁部下に横位単沈線文を施文した土器（第８図１・２）が存在する可能性がある。これは胴部中位のやや下がった所で括れ、胴部下半で張り出す本段階に共通した器形をもつからである。これは縄文付き凸帯文の凸帯貼付を省力化し、縄文と沈線で同様の効果を表現したものと考えられよう。また単沈線文の中には、口縁部下に縦位隆線を貼付したものがある（第８図１・２）。中部地方の諸磯ｃ式土器古段階（同図３・４）も口縁部下に限定的に縦位貼付文が貼付されることから、単沈線文土器のうちのあるものは諸磯ｃ式土器の影響を受けていると共に、諸磯ｃ式土器古段階に併行するものと考えられる。

本段階の資料としては岐阜県恵那市水無山遺跡出土資料（第１図３～ 17）（西部他 1982）がある。三重県松坂市山添遺跡 101 号住居址出土資料（小濱前掲）も北白川下層Ⅱｃ式土器古段階が混在しているが、本段階の土器を多く出土している。また愛知県豊田市水汲遺跡でも遺存率の高い本段階の資料が数多く報告されている（長田他 2011）。

水無山遺跡では諸磯ｂ式土器新段階（第１図 18）が出土しており、増子氏の言うように（増子 1985）、諸磯ｂ式土器新段階に併行することが考えられる。凸帯文は２～３条で、口縁部の屈折も強くなく、本段階の古相と評価できよう。一方口縁部の屈折が強く、凸帯が５条以上あり、短縦位線をもつものは、増子氏も紹介しているように（増子 1996）、岐阜県洞戸村市場遺跡（徳田他 1988）（第２図１～ 19）から出土しており、これは新相と評価できよう。ただし市場遺跡には古相とした２条凸帯文も多く出土し（第２図 13）、型式同定の難しさを表している。そこで本論では古相・新相の区別が存在することを示すにとどめておく。なお本段階は増子氏の大麦田Ⅱ・Ⅲａ式土器に相当する。

芦戸式土器（北白川下層Ⅱｃ式土器新段階併行）（第３図８・９）

東海地方西部の独自性が強い土器であるので、当該資料が最も充実している芦戸遺跡出土資料をもとに高木宏和氏が提唱した型式名称を使用する（高木前掲）。なお氏は芦戸式土器を芦戸Ⅰ～Ⅲ式土器に細分したが、筆者は高木氏の主張する時間的区別は存在しないと考え、細分名称は使用しないことにする。

本土器は凸帯文土器からなる。

口縁は波状縁と平縁があり、波状縁の波状は高くなる。口縁部内側が幅狭く肥厚し、肥厚部分に縄文が施文されるものが多い（第３図８､第６図 12）。これは前段階に存在する内折口縁（第６図９・10）の屈折度が強化することによってもたらされたものと思われ、同様のことは増子氏により既に指摘されている[7)]。またこれと同時に内側に肥厚しないもの（第３図９）も存在する[8)]。

最大径は口縁部にあるが、胴部中位で括れ、胴部下半が再び張り出す器形をなす。胴部下半の張り出しは強いものがあり、口径と胴部下半径がほぼ等しいものも存在する。

凸帯文は縄文付き凸帯文が主体となる。この他凸帯文上が素文のもの、爪形文を刺突したものが少量ある。凸帯文は口縁に沿って横走するものと、文様を描くものがある。文様が描かれるものは胴部上半に幅広く描かれる（同図８・９）。文様は横線を中軸線とし、それを挟むようにして２つの弧線が対向する中軸対向弧線文[9)] が主である。中軸対向弧線文はその左右両端から斜線が派生し、隣接する対向弧線文との間を連結している。胴部は斜行縄文が施される。

この斜線連結中軸対向弧線文は前段階の横位弧線文との連続性が辿れると思うものの、北白川下層Ⅱｃ式土器中段階の横位弧線文とは違いが大きい。筆者は文様施文域が幅広く、そこに小形の横位弧線文を多数、横位に並置した土器（第３図６・７）を芦戸式土器の初頭部分に置くのがよいと考えている。その横位弧線文の中には、横に長い弧線文と、短い弧線文がある。短い弧線文が対向弧線文に、長い弧線は斜線文に変化し、斜線連結中軸対向弧線文が成立した、と考えたい。

本土器型式を代表する資料は芦戸遺跡出土資料である（高木前掲）。同遺跡出土資料には北白川下層Ⅱｃ式土器中段階後葉の土器も含まれているが、それらは除外して考えたい。芦戸式土器は岐阜県下呂市的場遺跡 14 号住居址（大江 1993）、長野県大桑村万場遺跡（百瀬他 2001）などにも主体的に存在している。また岐阜県藤橋村上原遺跡出土資料（近藤他 2000）は非斜線連結の大形横位弧線文がまとまって出土しており、芦戸遺跡出土資料より後出の感じを受けるが、凸帯文上には縄文を施文している点で芦戸遺跡出土資料と共通することから、芦戸式土器の範疇に含めておく。なお本土器は主として岐阜県から長野県南部にかけて分布するものと思われる。

他地域土器との併行関係では、芦戸遺跡で、諸磯ｃ式土器新段階併行の中部地方に存在する花鳥山式土器（結節浮線文土器）が出土していることから（長沢 1989）、諸磯ｃ式土器新段階に併行すると考えられる。芦戸式土器に見る凸帯文の発展は、隆線文（結節浮線文）で曲線的文様を幅広く描いた中部地方の花鳥山式土器の影響を受けたものと考えられよう。

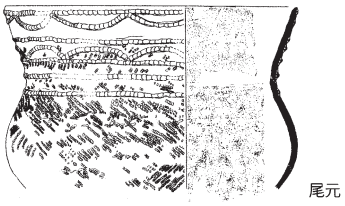
北白川下層Ⅲ式土器古段階（第３図 10・11）

この段階は近畿地方の土器群との類似性が高いので、近畿地方の型式名を用いる。松井政信氏・古川登氏（松井・古川前掲）・三好博喜氏（三好 1989）の口縁部形態変遷を参考にし、筆者独自の分別基準を設定して、北白川下層Ⅲ式土器を二分した[10)]。

本段階の土器は凸帯文土器からなる。

器形は頸部が強く括れ、胴部が大きく張り出し、胴部に最大径をもつ胴張鉢形土器が主体をなし、これに少量の深鉢形土器が伴う。両器種とも口縁部内側が幅狭く内削ぎ状に肥厚し、肥厚部分に縄文が施文されるものを本段階とした（第３図 10・11）。これは前段階に存在した口縁部内側の幅狭肥

厚帯が内削ぎ状に整形されたものと思われる。口唇部には縦位凸帯が貼付されることが多い。



第９図　胴張鉢形土器（1/10）

胴張鉢形土器（第３図 11）は平縁と波状口縁がある。波状口縁では上面観が方形をなす。凸帯文は縄文付き凸帯文と爪形刺突付き凸帯文、平行沈線付き凸帯文などからなる。縄文付き凸帯は口縁部・胴部下半など文様の上下端に使用される。文様帯の中央は爪形刺突付きや平行沈線でなぞった凸帯文で、爪形文や平行沈線が凸帯より幅狭いものでは、爪形文や平行沈線文の脇に凸帯の粘土が残っている。これらは特殊凸帯文と呼ばれているものである。特殊凸帯文による文様は口頸部と胴部、またはその一方に描かれる。口頸部は幅狭いため横位弧線文または対向弧線文が描かれるのみであるが、胴部は幅広いので、横位弧線文の他、同心円文が描かれる。地文には羽状縄文が施文される。内面に指痕、内面や外面頸部に爪痕がしばしば付く。この胴張鉢形土器の文様は芦戸式土器と共通した横位弧線文・対向弧線文を有することから、文様においては装飾性豊かな芦戸式土器の影響を受けた可能性がある。しかし鉢形土器は近畿地方に多く、羽状縄文の使用など前段階の芦戸式土器にない特徴を有することから、近畿地方で発達したものと考えられる。

なお岐阜県上原遺跡や尾元遺跡 154 号土坑では口縁部内面に肥厚帯をもたず、爪形刺突付き凸帯文で文様を描いた胴張鉢形土器（第９図）が存在する（春日井恒 2003）。東海地方西部で製作された北白川下層Ⅲ式土器の変形タイプと考えられるが、芦戸式土器の口縁部内面肥厚の特徴を継承しないことから、今後成立過程の検討が必要なものである。

深鉢形土器（第３図 10）も平縁と波状縁がある。胴部中位に括れをもつが、胴部の張り出しは強くないので、最大径は口縁部にある器形をなす。凸帯文上は素文となる。縄文（地文）は斜行縄文をもつ。文様帯は広く、胴部上半に大柄の中軸対向弧線文が描かれる。斜線連結がない点で前段階の芦戸式土器との違いがあり、北白川下層Ⅲ式期に残存した芦戸系土器と評価できよう。口唇部に縦位凸帯をもつ点は北白川下層Ⅲ式の胴張鉢形土器からの影響であろう。

本段階の資料としては、愛知県恵那市小御所遺跡などから良好な胴張鉢形土器（第３図 11）が出土している（増子 1998）。また長野県飯田市小垣外遺跡２号住居址出土の深鉢形土器（同図 10）（矢口 1973）がある。しかし鉢形土器と深鉢形土器の共存は現在のところ共伴出土事例では確認されていない。土器の口縁部形態の共通性をもって同時期と判断した。

北白川下層Ⅲ式土器新段階（第３図 12・13）

本段階の土器は凸帯文土器からなる。

器形は胴張鉢形土器が主体をなし、これに少量の深鉢形土器が伴う。両器種とも口縁部内側が内削ぎ状に肥厚し、肥厚部分に縄文が施文され、口唇部刻みを有するものを本段階とした（第３図 12・13）。これは前段階に存在した口唇部の縦位凸帯が変化して刻みが生成したものと思われる。鉢形土器では口唇部に刻みの付いた楕円形の突起を有するものがある。この突起が口縁全周に拡大し、大歳山式土器（第３図 14）の口縁部内外角への粘土紐貼付と刻みの付加に変化するのは、三好氏が指摘した通りである（三好 1989）。胴張鉢形土器は平縁（第３図 13）と波状口縁がある。凸帯文は爪形刺突付き凸帯文や刻み付き凸帯文からなる。

凸帯文による文様は口頸部と胴部、またはその一方に描かれる。描かれる文様は横位弧線文や対向弧線文で、円文も出現する。地文の縄文は斜行縄文が主となる。

深鉢形土器は胴部中位に括れをもつが、最大径は口縁部にある器形をなす。凸帯文上は素文となる。文様帯は広く、胴部上半に大柄の中軸対向弧線文が描かれる（第３図 12）。円文もある。縄文は斜行

縄文をもつ。芦戸系土器はこの段階まで残存する。口縁部内側が内削ぎ状に肥厚し、肥厚部分に縄文が施文され、口唇部刻みを有する特徴は、北白川下層Ⅲ式の胴張鉢形土器からの影響と考えられる。

本段階は岐阜県上原遺跡などに資料（第３図 12・13）がある。しかし鉢形土器と深鉢形土器の共存は出土事例で確認されたものではない。土器の口縁部形態の共通性をもって同時期と判断した。

4. 近畿地方における北白川下層Ⅱｃ式土器（後半期）・Ⅲ式土器の変遷

ここでは福井県嶺南（若狭地域）を含む、近畿地方の土器の様相を見てみる。当地域の北白川下層Ⅱｃ式土器後半期の資料は報告例が極めて少なく、先行研究（網谷 1981・1989、鈴木 2008）でも言及がほとんどなされていない。資料が増加するのは北白川下層Ⅲ式土器になってからである。現時点では報告資料が少ないので、様相は不明な点が多い。今後資料の増加を待って補足していく必要がある。

北白川下層Ⅱｃ式土器中段階（第 10 図１・２）

凸帯文土器が主で、平行沈線文土器が伴う。

凸帯文土器では口縁は平縁が多く、直立ないしは緩く内湾する。口唇部は内側に突出または角張り、角棒気味になる。東海地方西部同様、刻み付き凸帯文と縄文付き凸帯文がある。刻み付き凸帯文の刻みは細く、器面にも刻みが達しているものがある。

凸帯文は２条程度横走し、口縁部に限定的に施される特徴がある（第 10 図１）。胴部は羽状縄文が施文される。

平行沈線文土器は主として浅鉢形土器に用いられる（第 10 図２）。渦巻文などが描かれる。本段階の土器としては大阪府藤井寺市国府遺跡出土資料（第 10 図１）（浜田 1918・梅原 1935）、鳥浜貝塚 1983 年度調査 10 ～ 15 層出土資料（網谷他 1984）などがある。

北白川下層Ⅱｃ式土器新段階（第 10 図３）

本土器は凸帯文土器からなる。

胴部中位で括れ、胴部下半が大きく張り出す器形が存在する（第 10 図３）。東海地方西部の併行期の土器群および本地域の次段階の土器へのつながりから考えて、本段階に位置すると思われる。

凸帯文は縄文付き凸帯文からなる。凸帯文は口縁に沿って横走するものが存在する。京都府北白川小倉町遺跡では東海地方西部にある中軸対向弧線文を描くものが複数個体出土しているが（梅原 1935）、当該土器が本地域で製作されたものか、東海地方西部から搬入されたものは現時点では不明である。

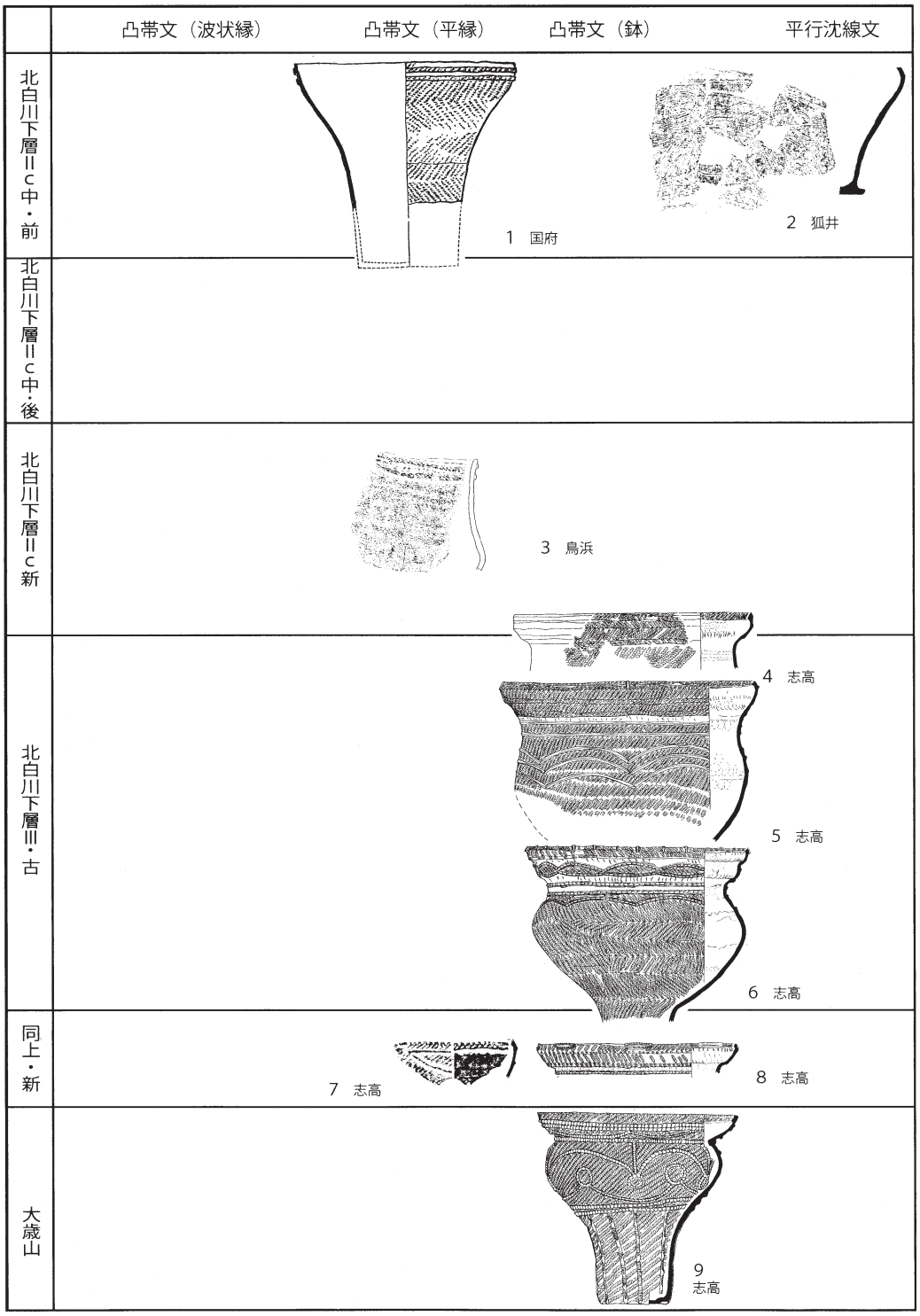
本段階については、型式学的観点から個体の存在を指摘することはできるが、量的に充実した報告資料がないため、土器組成は不明である。

北白川下層Ⅲ式土器古段階（第 10 図４～６）

北白川下層Ⅲ式土器は前段階に比べ、資料が充実している。東海地方西部でも述べたが、松井政信氏・古川登氏（松井・古川前掲）・三好博喜氏（三好 1989）による口縁部形態変遷観を参考に、独自の区分点を設定し、当該土器を二段階に分けて扱うことにする。

本段階の土器は凸帯文土器からなる。

器形は頸部が強く括れ、胴部が大きく張り出し、胴部に最大径をもつ胴張鉢形土器からなる。口縁部内側が幅狭く内削ぎ状に肥厚し、肥厚部分に縄文が施文されるのを基本にする（第 10 図４～６）。



第10図　北白川下層Ⅱｃ式・Ⅲ式土器変遷図　近畿地方（1/10）

口唇部には縦位凸帯が貼付されること（同図５・６）が多い。

口縁は平縁と波状口縁がある。波状口縁では上面観が方形をなす。凸帯文は縄文付き凸帯文と爪形刺突付き凸帯文、平行沈線付き凸帯文などからなる。縄文付き凸帯は口頸部や胴部下端の区画文として使用される。第10図４は縄文付き凸帯文だけで描かれた土器である。鈴木氏は縄文付き凸帯文だけで構成される土器を抽出して北白川下層Ⅲ式土器古段階にしているが（鈴木2008）、当該土器は量が少ない上、特殊凸帯文を省略した土器と捉えることができるため、筆者は特殊凸帯文土器と共に古段階とした。

文様は爪形刺突付きや平行沈線でなぞった特殊凸帯文で、横位弧線文・対向弧線文・同心円文などが描かれる。地文には羽状縄文が施文される。内面に指痕､内面や外面頸部に爪痕がしばしば付く。

本段階の資料は京都府志高遺跡（三好1989）で多く出土しているが（第10図４～６）、当遺跡では次段階の資料も含まれており、本段階の存在は型式学的理由に基づいている。

北白川下層Ⅲ式土器新段階（第10図７・８）

本段階の土器も凸帯文土器からなる。

器形は胴部が張り出す胴張鉢形土器からなる。口縁部内側が内削ぎ状に肥厚し、肥厚部分に縄文が施文され、口唇部刻みを有するものを本段階とした（第10図７）[11]。口唇部には刻みの付いた楕円形の突起を有するものがあり（第10図８）、三好氏が指摘したように（三好1989）、これが大歳山式土器（第10図９）に至り、口縁部内外角への粘土紐貼付と刻み付加に変化する。

本段階の資料も京都府志高遺跡（三好1989）で多く出土している（第10図７・８）。本段階の存在は型式学的理由に拠っている。

5. まとめ

北白川下層Ⅱｃ式土器の中段階前葉、従前（古段階）の爪形文土器は組成から無くなり、凸帯文土器と平行沈線文土器からなるようになる。凸帯文は凸帯文上に刻みを付けたものに加え、縄文を付けたものが登場し、次第に縄文付き凸帯文が主体をなすようになる。文様は口縁部付近に幅狭く限定される特徴があり、口縁部に横走する２・３条程度の凸帯文が施文される。この段階では東海地方西部と近畿地方の差は小さい。文様上では東海地方西部に横位弧線文があり、地文上では近畿地方に羽状縄文、東海地方西部に斜縄文が主体的に存在する。

北白川下層Ⅱｃ式土器中段階後葉、諸磯ｂ式土器新段階の影響を受け、東海地方西部では、凸帯文土器の口縁部が内折し、胴部中位が括れ、胴部下半が張り出す器形が登場する。

北白川下層Ⅱｃ式土器新段階、東海地方西部では地域性が顕在化し、芦戸式土器が成立する。芦戸式土器は口縁部内側に縄文が施文された幅狭肥厚帯をもち、括れる胴部中位の上方に、横位弧線文から発達した中軸対向弧線文を縄文付き凸帯文で描いたものであるが、こうした凸帯文による文様の発達は、結節浮線文による文様を発達させた中部地方の花鳥山式土器の影響を受けてのことと推察される。近畿地方ではこうした凸帯文での文様は発達せず､胴部下半が張り出す器形が存在した。

北白川下層Ⅲ式土器は胴部下半が張り出す器形が発達して胴張鉢形土器を生成した。口縁部内面には縄文付き肥厚帯が存在し、口頸部や胴部には凸帯文で横位弧線文・対向弧線文・同心円文が描かれるが、これは前段階の東海地方の芦戸式土器の要素を継承・発展させたものである。また北白川下層Ⅲ式土器に特徴である特殊凸帯文（竹管による加工を施した凸帯文）の祖形と思われる爪形文付き凸帯文は芦戸式土器の中に極少量みられる。しかし胴張鉢形土器は近畿地方に多い上、本土器の地文に羽状縄文をもつことは芦戸式にはない傾向であることから[12]、北白川下層Ⅲ式土器の鉢

形土器の発達は近畿地方で生起したものと思われる。北白川下層Ⅲ式土器は芦戸式土器の要素を取り入れて近畿地方で成立し、それが逆に東海地方西部に搬出され、北白川下層Ⅲ式期に存在する芦戸系土器の口唇部装飾などに影響を与えたと考えられる。

本論では北白川下層Ⅱｃ式土器（後半期）を３段階に細分し、中段階後葉については古相・新相の存在を指摘した。また北白川下層Ⅲ式土器は２段階に分けた。これは従来の増子氏・三好氏らの細分研究と細分数は同じであり、段階数を見ると先行研究を追認したに過ぎない。しかし文様の基本的流れは従来の研究より詳しく捉えることができたと考えている。今後は、現在資料が不足している近畿地方内部での北白下層Ⅲ式土器の成立前夜の様相の一層の解明が必要である。

謝辞

本論の作成にあたり、柳澤清一先生にはプロジェクト研究を通じてご指導いただきました。また以下の方々にもお世話になりました。文末ではありますが、お礼申し上げます。
稲畑航平・長田友也・金子直行・鈴木徳雄・関根慎二・谷藤保彦・細田　勝・増子康眞・町田賢一・山岸洋一

註

１）山内清男氏の北白川下層土器３細分の内容は江坂氏の記述（江坂 1951）から間接的に知るしかないので、江坂氏の記述した北白川下層式土器の細分内容がどの程度山内氏の考えを忠実に紹介しているかはわからない。その点、小野正文氏（小野 1989）も取り上げている佐原真氏（佐原 1956）による山内氏説の紹介（「私の誤解でなければ、山内先生は（中略）梅原先生が特殊凸帯文土器と呼ばれた類をⅢ式（中略）に分けられた」）は、その信憑性を考える上で、重要である。

２）春成秀爾氏は直良氏のプライオリティを尊重し、直良氏の大歳山式土器第二類・第一類をそれぞれ大歳山Ⅰ式・大歳山Ⅱ式とすべきであったと述べ（春成 1987）、小杉氏もその考えを支持している（小杉 1991）。

３）北白川下層Ⅱｃ式土器中段階の土器で、外面の凸帯文の最上条が口縁部上端に貼付される土器（第６図４）は、口縁外面にも突出するので、口縁内外面に突出または角張る。

４）小の原遺跡１号住居址出土資料には北白川下層Ⅱａ式・ｂ式・Ⅱｃ式土器古段階の土器が混じっている（宇野他 1991）。また大麦田遺跡出土資料には諸磯ｃ式土器古段階の土器が混じっている（吉田他 1968・川合他 2013）。

５）本段階と考えられる御望遺跡９号住居址出土の報告書第 133 図 243 は、凸帯文上に爪形刺突を施している（内堀 1995）。

６）市場遺跡では諸磯ｃ式の縦位集合沈線土器（報告書 Fig.22-9・10）（徳田 1988）が出土しているが、これは貼付文が口縁部のみならず胴部にも貼付されており、筆者は関東地方北部の諸磯ｃ式土器新１段階（松田 2001）と考えている。筆者の編年観に基づくと、やや新しい時期の所産である。

７）増子氏は「フ字形に内折する（中略）口縁部形状を簡略化させた可能性が強い」と指摘している（増子 1996　18 頁）。

８）凸帯文が横走するだけのものは、口縁部が内側に肥厚しないものでは、北白川下層Ⅱｃ式土器中段階との区別が難しい　。

９）増子氏は「中軸楕円文」と呼称している（増子 1985）。

10）松井・古川 1983 では口縁内面の縄文帯の有無や幅を基準にした区分となっていた。また三好 1989 では口唇部の楕円形刻み付き凸帯（突起）のある段階を新段階、それ以前を古段階とされた。確かに突起は大歳山式の口唇部装飾の祖形であり、それが北白川下層Ⅲ式土器の新段階であることは間違いないが、突起がないものもあるので、突起と同時に存在した口唇部刻みを有する資料をもって筆者は新段階とした。また鈴木康二氏は縄文付き凸帯のみで構成される土器群を北白川下層Ⅲ式古段階とされた（鈴木 2008）。当該土器の口唇部断面形態は筆者の古段階と同じものがあることから、筆者は当該土器について特殊凸帯文の省略または口唇部縦位凸帯が省略された古段階の土器と考え、当該土器だけを古く考えることはしなかった。

11）口縁部内面の肥厚帯は幅狭いものと幅広いものがある。三好氏は 1989 年、北白川下層Ⅲ式土器を細分する際、内面の肥厚帯の幅は基準にしなかったが（三好 1989）、妥当な判断であったと思う。

12）近畿地方の北白川下層Ⅱｃ式土器中段階に羽状縄文が存在することはわかっているが、新段階における存在の確認はできていない。

引用・参考文献

天野賢一他 1997『宮畑遺跡・矢頭遺跡・大久保遺跡』かながわ考古学財団調査報告 25　かながわ考古学財団

網谷克彦 1979『鳥浜貝塚　－縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査 1』福井県教育委員会

網谷克彦 1981「北白川下層式土器」『縄文文化の研究３　縄文土器Ⅰ』雄山閣

網谷克彦 1989「北白川下層式土器様式」『縄文土器大観１　草創期・早期・前期』小学館

網谷克彦他 1984『鳥浜貝塚　1983 年度調査概報・研究の成果』福井県立若狭歴史民俗資料館

今福利恵 1999「山梨県内の諸磯式土器」『第 12 回縄文セミナー　前期後半の再検討』縄文セミナーの会

今村啓爾 1981「諸磯式土器」『縄文文化の研究３　縄文土器Ⅰ』雄山閣

今村啓爾 2000「諸磯ｃ式土器の正しい編年」『土曜考古』24　土曜考古学研究会

岩橋陽一他 1992「諸磯ｂ式土器の展開とその様相－多摩丘陵からの視点」『研究紀要ＸⅠ』 東京都埋蔵文化財センター

内堀信雄 1995『御望遺跡』岐阜市教育委員会

宇野治幸他 1991『小の原・戸入障子暮遺跡』岐阜県教育委員会

梅原末治 1935「京都白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告第 16 冊』

江坂輝弥 1951「縄文式文化について（一○）縄文式文化前期」『歴史評論』32

大江まさる 1973『北裏遺跡』可児市教育委員会

大江まさる 1983『島中通遺跡発掘調査報告書』白川村教育委員会

大江まさる 1993『的場遺跡』岐阜県萩原町教育委員会

大野政雄他 1960『村山遺跡』

岡田茂弘 1965「縄文文化の発展と地域性７　近畿」『日本の考古学Ⅱ　縄文時代』河出書房

沖島卯之他 1958「三重県上野市田中遺跡の縄文土器」『古代学研究』18　古代学研究会

長田友也他 2011『水汲遺跡　第２・３・５・６次調査』豊田市教育委員会

小野正文 1989「中部地方における北白川下層式土器の研究（北白川下層式土器の研究史）」『国学院大学考古学資料館紀要』５　国学院大学考古資料館

小濱学 2006「縄文時代前期の土器編年」『斎宮歴史博物館研究紀要』15　斎宮歴史博物館

小濱学他 2007『山添遺跡（第４次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告 280　三重県埋蔵文化財センター

春日井恒 2003『尾元遺跡』 岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書 80　岐阜県文化財保護センター

鎌木義昌 1959「広域文化圏の形成　縄文前期文化」『世界考古学大系第１巻　日本Ⅰ先縄文・縄文時代』平凡社

鎌木義昌他 1956「中国」『日本考古学講座　第三巻　縄文文化』河出書房

鎌木義昌他 1965『日本の考古学Ⅱ　縄文時代』河出書房

神村透他 1982『崩越』大滝村の文化財２　長野県木曽郡王滝村教育委員会

川合剛他 2013「万場垣内遺跡・牛地町大麦田遺跡」『新修豊田市史 18　資料編　考古Ⅰ　旧石器・縄文』豊田市

小杉康 1984「物質的事象としての搬出・搬入・模倣製作」『駿台史学』60　駿台史学会

小杉康 1985「鳥浜貝塚における搬入土器・模倣土器の研究」『鳥浜貝塚－縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査５』福井県教育委員会

小杉康 1991「大歳山式土器の基礎的理解に向けて－三矢田遺跡第Ⅴ群土器」『真光寺・広袴遺跡群Ⅵ　三矢田遺跡』鶴川第二地区遺跡調査会

小杉康 1995「文化制度としての模倣製作」『飛騨と考古学　飛騨考古学会 20 周年記念会誌』飛騨考古学会

小杉康 1999「飛騨地方の前期後半の土器」『前期後半の再検討』縄文セミナーの会

小杉康 2003『縄文のマツリと暮らし』先史日本を復元する３　岩波書店

近藤大典他 2000『上原遺跡Ⅱ』岐阜県文化財保護センター調査報告書 54　岐阜県文化財保護センター

佐原真 1956「土器面における横位文様の施文方向」『石器時代』３　石器時代文化研究会

白石浩之 1983「諸磯ｂ式土器の型式細分とその問題点」『人間・遺跡・遺物』1　発掘者談話会

鈴木康二 2008「北白川下層式土器」『総覧縄文土器』『総覧縄文土器』刊行委員会

鈴木康二 2008「特殊凸帯文系土器（北白川下層Ⅲ式・大歳山式土器）」『総覧縄文土器』『総覧縄文土器』刊行委員会

鈴木敏昭 1980「諸磯ｂ式土器の構造とその変遷（再考）」『土曜考古』２　土曜考古学研究会

鈴木徳雄 1979『白石城』 埼玉県遺跡調査会

関根慎二 1999「群馬県における諸磯ｂ式土器の細分」『第 12 回縄文セミナー　前期後半の再検討』縄文セミナーの会

高木宏和 1989『芦戸遺跡』坂祝町教育委員会

田中彰 1999『中切上野遺跡発掘調査報告書』高山市教育委員会
谷口康浩 1989「諸磯式土器様式」『縄文土器大観　1　草創期・早期・前期』 小学館
徳田誠志他 1988『岐阜県洞戸村市場遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 洞戸村教育委員会
直良信夫 1926a『播磨国明石郡垂水村山田大歳山遺跡の研究』直良石器時代文化研究所
直良信夫 1926b「近畿地方に於ける縄文土器の研究」『考古学雑誌』16-6　考古学会
直良信夫 1926c「近畿地方に於ける縄文土器の研究（二）」『考古学雑誌』16-12　考古学会
直良信夫 1927「近畿地方に於ける縄文土器の研究」『考古学雑誌』17-4　考古学会
直良信夫 1943「大歳山遺蹟」『近畿古代文化叢考』葦牙書房
直良信夫 1987『大歳山遺跡の研究』真陽社
長沢宏昌 1989『花鳥山遺跡・水呑場北遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告 45　山梨県教育委員会
中島宏 1980『伊勢塚・東光寺裏遺跡』埼玉県遺跡発掘調査報告書 26　上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ
中村善則 1986「播磨大歳山遺跡Ⅰ－縄文土器」『神戸市立博物館研究紀要』３　神戸市立博物館
夏目和之 1992「矢作川上流域の縄文文化研究（Ⅱ）－小御所・久武瀬遺跡の縄文文化」『古代人』53　名古屋考古学会
西部良治他 1982『阿木川ダム関係遺跡発掘調査報告書』恵那市教育委員会
丹羽佑一 1975『武山遺跡発掘報告』洲本市教育委員会
馬場伸一郎 2012「縄文時代前期後半の飛騨を中心とした地域間交流」『下呂ふるさと歴史記念館開館 40 周年記念事業シンポジウム　縄文・峰一合遺跡の時代の再検討』 下呂市教育委員会・下呂市ふるさと歴史館
羽生淳子 1987「諸磯ｂ式土器」『季刊考古学』21　雄山閣
浜田耕作 1918「河内国府石器時代遺跡発掘報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告第二冊』京都帝国大学
浜田耕作他 1920「河内国府石器時代遺跡第二回発掘報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告第四冊』京都帝国大学
春成秀爾 1987「直良信夫氏と大歳山遺跡」『大歳山式土器の研究』真陽社
細田勝 1999「南関東における諸磯式土器の様相」『第 12 回縄文セミナー　前期後半の再検討』縄文セミナーの会
増子康眞 1975「東海地方縄文文化研究の現状」『東海先史文化の諸段階』
増子康眞 1981「東海地方西部の縄文文化」『東海先史文化の諸段階　本文編・補足改訂版』
増子康眞 1982「北白川下層式土器の再検討」『考古学研究』29-1　考古学研究会
増子康眞 1985「北白川下層式Ⅱａ・Ⅲ式平行の東海地方西部の土器」『古代人』45　名古屋考古学会
増子康眞 1992a「小御所・久武瀬遺跡の縄文前期土器について」『古代人』53　名古屋考古学会
増子康眞 1992b「東海西部の縄文前期後半（凸帯縄文）土器の研究」『古代人』53　名古屋考古学会
増子康眞 1996「縄文前期後半・大麦田式土器の再検討」『古代人』57　名古屋考古学会
増子康眞 1998『上村川下流域の考古学的調査』上矢作町教育委員会
増子康眞 1999a「東海地方の諸磯ｂ式平行段階の様相」『前期後半の再検討』縄文セミナーの会
増子康眞 1999b「東海地方　前期」『縄文時代』10　縄文時代文化研究会
増子康眞 2001「縄文前期の鉾ノ木Ⅱ式と小御所式土器」『伊勢湾考古』15　知多古文化研究会
増子康眞他 1999『ヒロノ遺跡　第２次調査報告書』稲武町教育委員会
松井政信・古川登 1983「三方郡美里町浄土寺遺跡出土の遺物について（その１）」『福井考古学会会誌』創刊号　福井考古学会
松田光太郎 2001「関東・中部地方における諸磯ｃ式土器の変遷」『神奈川考古』37　神奈川考古同人会
松田光太郎 2007「獣面把手の変遷とその地域性」『縄文時代』18　縄文時代文化研究会
松田光太郎 2013「諸磯式土器における浮線文の発生と北白川下層Ⅱｃ式土器の成立」『型式論の実践的研究Ⅱ』人文社会科学研究科研究プロジェクト　千葉大学人文社会科学研究科
三好博喜 1988「志高遺跡出土の土器にみる北白川下層Ⅲ式土器の発展過程」『京都府埋蔵文化財情報』29　京都府埋蔵文化財調査センター
三好博喜 1989『志高遺跡』京都府遺跡調査報告書 12 冊　京都府埋蔵文化財調査研究センター
百瀬忠幸他 2001『中山間総合整備事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書　万場遺跡』長野県大桑村教育委員会
森川昌和 1963「福井県鳥浜貝塚をめぐる２、３の問題」『物質文化』１　物質文化研究会
矢口忠良 1973「小垣外・辻垣外」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－飯田市地内その２』長野県教育委員会
山岸洋一 1996「縄文前期「特殊凸帯文土器」細分の可能性－文様施文技法の検討を中心に」『信濃』48-4 信濃史学会
山崎真治・高橋健 2007『彦崎貝塚の考古学的研究』東京大学総合研究博物館研究報告 43　東京大学総合研究博物館
山内清男 1928「下総上本郷貝塚」『人類学雑誌』43-10　東京人類学会

山内清男 1937「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』1-1　先史考古学会
山内清男 1939『日本先史土器図譜　第二輯』 先史考古学会
横山浩一・佐原真 1960『京都大学博物館資料目録』京都大学
吉田富夫・紅村弘 1968「万場垣内遺跡」『矢作ダム水没地域埋蔵文化財調査報告』愛知県教育委員会
渡辺誠他 1985『阿曽田遺跡発掘調査報告書』中津川市教育委員会
渡辺誠他 1988『落合五郎遺跡発掘調査報告書』中津川市教育委員会